直言

東京大学大学院教授
大沼　保昭

勇気ある人生求めて

この一年を振り返り、来る年に思いをめぐらす。年の瀬には、せわしい仕事の合間にそうしたひとときもある。多くの人はこの一年は早かったなあとつぶやき、この調子で一生が終わるんだろうな、と続く人もいる。とくに年を重ね、肉親や友人との死別の機会が増えると、人は自分の「逝き方」を切実に考えるようになる。

多くの人は、きれいに死にたい、長患いしたくない、まわりに迷惑をかけないで逝きたい、という。死に際をよくしたい。これが、医学が発達したおかげで見苦しく長く生かされてしまうわたしたち現代人の共通の願いである。

それはまちがいだ、と花園大学の佐々木閑教授はいう。立派な人が立派な死に方をするわけではない。死に際の良し悪しは運の問題で、悪人でも運がよければきれいな死に方をする。善人でも運悪く痛みの激しい病気になれば泣きわめいて死なければならない。死に際で人を判断してはならない。人生の意味はその人生の全体にある。最後が悲惨であったとしても、それで人生すべてが否定されるほど人の一生は薄っぺらなものではない。これが佐々木さんの考えである（「日々是修行」『朝日新聞』二〇〇七年十二月二十日（夕刊））。

何と素晴らしい教えだろう。

わたしは今年親友を亡くした。前日まで元気に仕事をしていて翌朝意識不明になり、その日のうちに亡くなるという慌ただしさだった。六十一歳で現役の経営者だったから、本人にはやり残したことが山ほどあったろう。前の晩まで元気な顔を見ていた遺族にはたまらないことだろう。ただ、「死に際がきれいでありたい」という現代人の常として、正直うらやましい、という気持ちもちょっぴりわたしにはあった。

しかし、それはおそらく違うのだろう。佐々木さんの教えはそのことに気付かせてくれる。

彼は、山形の小さな海産物の卸・小売り業者でありながら、米国、ブラジルなどの海外市場に進出して日本の食文化を世界に広める一翼を担ってきた。主力商品は海苔だったから、海外における寿司の普及に伴って、彼の販路も世界各地に広まって行った。

死に際で判断しない

ただ、彼は今日のように日本食が世界中でブームになってから海外に出て行ったわけではない。海外で日本食がほとんど知られていなかった一九八〇年代に米国に進出し、真っ黒い紙みたいなものが食えるか、という偏見と闘いながら地道に販路を拡大していったのである。わたしはそのことを本紙の九三年十月五日付の「わたしのやまがた論」に書いたことがある。米国の日本料理屋の板前さんの目隠しコンテストで、全来二十七種の海苔のうち、彼の扱う海苔が上位四品中三つを占めたという快挙を紹介したものだった。

佐々木教授は、安らかに逝く人の姿は素敵だが、誇りをもって自分の正しい生き方を決めていく人の姿の方がもっと素晴らしい、なぜならそれは運不運と関係のない、その人の本質的な思いを映し出すものだから、という。その通りと思う。

友人の死が立派なものだったのは、その死に方がきれいだったからではない。海外でまだ日本食が知られていない時代に、資金も手勢もない山形の小さな会社の経営者が敢然と海外に進出し、良質の商品を世界の消費者に提供して販路を開拓して行った。その勇気ある生き方が素晴らしいものだったからこそ、その死も立派に感じられたのだ。

自分はそのように勇気をもって人生を生きているだろうか。時折みずからにそう問いかけながら一日一日を生きて行きたい。それは困難な生き方ではある。だがそれは、死に方についてあれこれ思い悩むより、自分にとっても、死に際を見てくれるかもしれないまわりの人にとっても、前向きで、意義のある生き方であるに違いない。